

COIL とワークショップ併用における学習意欲向上の試み

辻井 さとみ (ポルト大学)

要旨

言語教育において、オンラインの最も難しい問題の一つは学習者の学習意欲の継続ということだろう。言語教育における動機づけの研究は数々成されているが、オンライン言語教育における動機づけの研究はまだ希少である。したがって本稿ではオンライン言語教育における動機づけ、学習意欲の向上に焦点を当て検証を試みる。筆者は、2019 年より COIL (collaborative online international learning) を用い2年間の研究を行ったが、その研究において、言語能力、異文化理解の向上に有効性が見られた。このような先行研究を踏まえて、本稿では、学習者の学習意欲をさらに高めるため、COIL とドラマ作成のワークショップを組み合わせる試みを行った。ワークショップと COIL 併用により、COIL での討論の内容がより深まり、日本語学習意欲の向上、学習継続の意思の向上も見られた。これは、オンラインでも学習意欲の長期の持続が可能であることを示すものであると考える。

【キーワード】 COIL, 動機づけ, オンライン学習, ドラマ作成, 学習意欲の向上

Keywords: COIL, Motivation, Online learning, Drama production, Improvement of study motivation

1 はじめに

パンデミックは、言語教育に多様な変化をもたらし、対面から完全オンライン、あるいはハイブリッドという形式への移行は、教師、学習者双方に多大な影響を与えた。言語教育において、オンラインの最も難しい問題の一つは学習者の学習意欲

の継続ということだろう。

言語教育における動機づけの研究は数々成されているが、オンライン言語教育における動機づけの研究はまだ希少である。したがって本稿ではオンライン言語教育における動機づけ、学習意欲の向上に焦点を当て検証を試みる。

1.1 先行研究

筆者は、2019年より COIL (collaborative online international learning) を用い2年間の研究を行ったが、その研究において、言語能力、異文化理解の向上に有効性が見られ、また、教師のファシリテーションが学習の継続に多大に影響することも認められた。(中西, 辻井 2020) (辻井, 中西 2021) このような先行研究を踏まえて、本稿では、学習者の学習意欲をさらに高めるため、COIL とワークショップを組み合わせる試みを行った。ワークショップには、ドラマ作成を用い、COIL とワークショップの組み合わせによる有効性を検証した。

第二言語学習の動機づけの研究に関しては、日本語教育分野において動機づけの困難さを、守谷 (2002) は次のように述べている。「動機づけのストラテジーのようなものにまで言及した研究は日本語教育には見られず、今後の更なる研究の積み重ねが望まれる」「『動機づけは何であるのか』という構成要素の複雑さとともに、動機づけの度合いを『何で測るのか』という方法的な問題があるものと思われ、それらが複雑に絡み合って高い障壁を築いてきた」(2002 pp 326) 動機づけ要因の一つに「社会的モデル」があるが、これは文化的かつ社会的な動機づけである「統合的動機づけ」と、実利的な目標を達成するための意欲である「道具的動機づけ」の二つから構成されている。Gardner (1985) は、統合的動機づけが高い学習者の方が習熟度が高いという仮説を立てたが、この研究は ESL(English as a Second Language) を対象としたものであり、その後 EFL (English as a Foreign Language) では、道具的動機づけの高い学習者の方が高い習熟度を示す例も見られた。

Dörnyei (2003)は、第二言語教室の動機づけの構成要素として、(1)「統合的動機

づけ (integrative motivation) 」， (2) 「言語的な自信 (linguistic self-confidence) 」， (3) 「教室環境への評価 (the appraisal of the classroom environment)」の3つをあげている。

(1) 「統合的動機づけ」は、道具的な知識への志向をも含む多くの志向と結びついていて、(3)の「教室環境への評価」は、グループの団結性とも関わることが明らかになった。また、のちに「言語レベル (language level)」(目標言語の言語・文化的、知的、実用的価値、目標言語に対する態度)，(2)「学習者レベル (learner level)」(学習に対する自信や達成への欲求)，(3)「学習状況レベル (learning situation level)」(コース・教師・グループ特有の動機づけ)の3レベルに整理し、動機づけの構成要素としてまとめている。このうち、教師特有の構成要素とは、教師のふるまい、人格、教授方法、フィードバックなどであり、教師を喜ばせたいという学習者の感情も含まれる。さらに、グループ特有の構成要素は、学習者協働学習や、クラス全体の目的などとも関わるものである。

このような先行研究を踏まえ、本稿では、「統合的動機づけ」による第二言語学習で学習者が高い習熟度を示すことができるかどうか考察をする。

2 研究概要

この章では、研究対象者、研究方法など研究概要について詳細を記し、分析を試みる。

2.1 対象者

対象者はポルトガル人日本語学習者8名(社会人、学生)で、レベルは初中級であるが、日本語運用能力には多少のレベル差がある。対象者の中には日本語が主専攻、副専攻の学習者は全く含まれていない。学習者の日本語学習開始の動機は、子供のころ日本のアニメを見て、日本文化や言語に興味を持ったというのが圧倒的に多く、その後、ゲームや日本の食べ物を食べたり、テレビドラマをみたりして、さらに日本への興味を深めている。しかし、子供のころに具体的に日本語を勉強し

たいと思ったわけではなく、青年期に入ってから関心が高まった例が多い。禅の本を読んで興味を持ったものもいた。8名とも統合的動機づけによる日本語学習だが、そのうち2名は途中から日本留学という目的に向かって学習を始めたので、統合的動機づけと道具的動機づけの複合動機を持つ学習者と考えることができる。

2.2 研究期間と研究方法

研究期間は2022年3月～8月の6カ月間である。COILとドラマ作成のワークショップをそれぞれ月一回行った。ドラマ作成もオンラインで行っている。ドラマ教育の手法は言語教育において取り入れられているが、日本語教育の分野においては比較的新しい手法の一つだと思われる。また、対面での教育方法が主流でオンラインでの例はあまり見られない。

ドラマ作成では、まず、日本のドラマ「深夜食堂」のいくつかのエピソードを視聴し、エピソードの分析を行った。「深夜食堂」を用いたのは、ひとつのエピソードが比較的短く、日本の慣習や文化を知ることができるという理由からである。その後、ポルトガルを舞台にした「深夜食堂」を模した **Bom Sabor** というドラマのエピソードをいくつか作成した。COILでは、ワークショップでの学習を反映させたトピックを設定し、討論するという方法をとった。

事前、事後に動機に関するアンケート、インタビューを実施して、その後回答を分析した。アンケートは多肢選択ではなく、記述式とし、学習者の考え方が反映されやすいようにした。ドラマ作成、発表に関して点数での評価は特に行っていないが、フィードバックはなるべく早く必ず行った。

3 ドラマ作成

このドラマ作成の利点としては、レベルの違う学習者の協働作業が可能になる、ドラマを作成するために自律学習の必要が生じるなどがあげられる。学習者は約10分のエピソードをグループで作成し、それをオンラインで発表する。エピソードに

はポルトガルの文化を必ず一つ含めることというルールを設けてある。学習者は1週間に1回自主的な集まりを数回行いひとつのエピソードを完成させている。筆者は完成したものを発表前に添削し、フィードバックした。その後、添削をもとに書き直したドラマをオンラインミーティングで発表し、その後トピックについて日本人参加者と議論する形式をとった。トピックは学習者によって決定されたもので、筆者は全く関与していない。

3.1 ドラマの分析

ドラマのトピックは回ごとに異なる学習者が発案し、その発案者がリーダーシップをとってドラマの制作を進めている。タイトルはドラマの主人公の名前になっている。トピックは表1に見られるように多岐にわたっていて、ポルトガルで昨今問題になっている事例を取り上げている。食物についてはポルトガルの伝統的な食べ物や地方色の強い食べ物を取り上げている。回を経るごとに文法の間違いが少なくなり、自然な会話を使えるようになってきていることがみてとれたが、第一人称の使い分け、終助詞の使用については、なかなか進歩が見られなかった。

表 1: ドラマ作成の内容例

タイトル	文化	食べ物
1 ティアゴ	男女の仕事についての偏見	コーヒー, アロス・ドス
2 パウロ	芸術的な仕事のサポートがない, リスボンに仕事が偏っている, 学位取得しないといい仕事につけない。 ポルトガルのラジオでは 30%, ポルトガルの音楽を流さなければならない。(文化保護のため)	エコノミコ サイダー (シードル)
3 ロザ	ホールの高文脈, 低文脈文化	トレモソシュ パプス・デ・アンジュ
4 マリア	ポルトガルの農業労働, フランスのポルトガル人移民	カルド・ヴェルデ ブロア・デ・アヴィンティス いちごのリキュール

3.2 事前・事後アンケート・インタビューの回答分析

日本文化との最初の出会いについては、ほぼ全員幼少期のころにアニメ、ゲーム、歌、武道と出会ったのが最初と答えている。しかし、当時はそれらが日本のものとは知らず、後に日本のものと知ってから、日本文化や日本語に興味を持ち始めた学習者が多い。勉強し始めた時点では、日本文化、言語をまなびたいという理由が漠然としたものからさらに明確になっている。語学学習を途中でやめた経験については一人を除いて、すべての学習者があると答えていて、興味がそれほどないが必修だったので学んだ言語、仕事に必要なだったので学んだ言語、ラテン語などの今では使用されていない言語は途中で学習を放棄していることが多い。勉強を継続するために必要なことは何かという問いには、少しでもいいから上達していると感じられること、授業が興味深いこと、クラス的环境、よい教師、強固な理由と目的が必要である、など様々な回答が見られた。中でも、教師と授業の質が重要であると考えている学生が多く目立った。教師の質については、やさしくサポートしてくれる教師という回答が最も多く、教師に厳しさを求めていることが興味深い。ほかには、学生に興味を持たせ、創造性を引き出してくれる教師、フィードバックが早い、授業構成がしっかりしている、という回答も見られた。

今、日本語を勉強している理由については、好きだからという理由が一番多かったが、ビジネス、旅行、日本人と意思疎通ができるようになりたい、という回答も多く見られた。どんな方法で勉強を続けたいかという問いについては、普段の会話も学べるような方法という回答が一番多く、それに続いて難しい文法、漢字を知りたいという回答が多かった。多くの回答者が、グループ授業と一人で学習する方法のコンビネーションがよいと述べていて、協働学習が継続するうえで大切なことがわかる。

一方、コミュニケーションが目的なので、漢字や文法はあまり重要ではない、たくさん話して流ちょうに話せるようになるような授業がよい、難しい文法を学ぶことも重要だが今のところは自分が知っていることを使いこなせるようになりたいと

いう意見もあった。オンラインか、対面かについては、圧倒的に対面という意見が多かった。オンラインと答えた学習者も時間の融通がきく、通学時間がなくてすむという実用的な理由が多く、そういうものが障害にならなければ対面のほうがいいと答えている。オンラインは集中するのが難しく、ほかの学生とインタラクションできないという問題点があげられていた。ドラマ作成については、ドラマを作ることはストーリーを作ることによって文法の勉強したり、文化を知ることができるのでよいというような肯定的な回答が多かった。難しい点については、「この知らない言葉の意味は私が言いたいことと同じ意味かなということだった」と回答した学習者がいた。フォーマルとインフォーマルな会話の区別を学べる点は良い点でもあるし、難しい点でもあると答えた学習者もいた。ほかの難しい点としては、すらすらとわかりやすく話すのが難しい、自然な会話を作るのが難しい、ある特定のコンセプトを表現するのが難しいなどがあり、スピーチスタイルの使い分けが難しいことが見て取れる。

以上のアンケート、インタビュー結果から、Dörnyei (2003)が指摘している、グループの団結性、教師のふるまい、人格、教授方法、フィードバックなどが動機づけと密接に関係していて、教師を喜ばせたいという学習者の感情も学習動機に関係が深いことが見て取れる。

4 COIL

作成したドラマをもとに、COILで日本人参加者約8名とポルトガル文化について討論を行った。日本人参加者は社会人、日本語教師などで、ポルトガル滞在歴のある者も含まれている。COILは約30分の時間内で行った。学習者にとって日本語は外国語であり、さらにオンラインで集中できる時間を考慮に入れると30分という時間が最も効果が上がると思われるからである。COILの最初に学習者に取り扱った食べ物の文化についての説明をPPTなどを用いて日本語で説明してもらい、ポルトガルの食べ物に詳しくない参加者にもどのようなものかがよくわかるようにした。その

後、エピソードで取り扱ったトピックについてポルトガルの状況を説明し、日本と比較を試みた。

4.1 先行研究の COIL との違い

これまで行ってきた COIL では主に日本文化をポルトガル人学習者が学習するという形式をとってきたが、本研究では日本人参加者にポルトガルの文化をしってもらうという形式に変更した。また、以前の COIL では、トピックを筆者が決定していたが、本研究ではトピックはすべて学習者によって選択されている。

4.2 COIL の効果

日本語学習者にとっては、自分たちが制作したドラマを日本人参加者に見てもらうことにより、日本語の発音などについてのフィードバックを直接得られるという利点がある。参加者に見てもらうために練習しようとする態度が見られ、それが発音や流ちょうに話すことにつながった。また、ポルトガルの文化を日本人がどう感じるかという興味が得られ、新たな学習意欲が高まるという効果が見られた。

日本人参加者については、最近 COIL に参加していなかった者の参加があった。これは、ポルトガル文化への興味から参加意欲が高まったものと思われるが、COIL を行うにあたって、学習者、日本人参加者の双方に何らかの得るものがあるという点も重要であると思われる。

5 COIL 参加学習者と学部生の比較

ここで日本語能力の向上について、COIL 参加学習者とポルト大学に在籍している学部生の比較を行う。ポルト大学の学生は選択科目として日本語を学習している学生でレベルは初級である。授業はオンラインではなくすべて対面で行われた。学部生の日本語学習動機は COIL 参加者とほぼ同じであるが、よい成績をとりたいという目標がある。したがって、道具的動機づけにより日本語学習を行っていると考え

られる。

COIL 参加者が自主的学習に高い意欲を示したのに対し、学部生には意欲はみられなかった。成績を非常に気にする傾向がみられ、よい成績をとるために努力はするが、それ以上の努力はしない。結果、文法を機械的に使用することはできるが、日本語運用能力は劣ることを示した。学部学生に COIL への参加を勧めたが、参加しても一回のみで継続は困難だった。

学部生の目標達成は短期的なものであり、その目標を達成してしまえば学習を継続する意味を失ってしまう場合が多い。一方、COIL 参加者の目標達成は長期的なものであり、達成の過程もゆるやかである。それだけに、統合的動機づけのみの学習者は学習に興味を失う可能性が高い。興味を維持させるための教師の働きかけが必要であり、その点においてドラマ作成は意欲向上に効果的だった。

COIL 参加の統合的+道具的の複合的動機付けをもった学習者の伸びが最も顕著であった。本来日本語に対して持っている興味と目的達成への目標が相乗効果をもって現れたためと考えられる。統合的動機づけの学習者は、学習への興味を維持させるため教師の働きかけが必要であるが、統合的+道具的の学習者は教師の働きかけがなくても自主学習が可能であることを示している。

6 まとめ

ワークショップと COIL 併用により、COIL での討論の内容がより深まり、日本語学習意欲の向上、学習継続の意思の向上も見られた。これは、オンラインでも学習意欲の長期の持続が可能であることを示すものであると考える。また、動機づけには教師の役割が大いに関与している。統合的動機づけにより日本語学習を行っている学習者は、好奇心が旺盛で、長く学習を続けたいという意欲が見られる。しかし、その長期的な目標を達成する意欲を維持するため、教師の援助が必要であることがわかる。したがって、教師の適切な援助があれば、オンライン授業という制限の中でもドラマなどのワークショップを行うことにより、学習意欲の持続は可能であり、

日本語能力も向上させることができると考えられる。

今後の課題としては、本研究では学部学生にはドラマ作成の課題を行っていないので、ドラマ作成などのワークショップを行えば意欲の向上がみられるのかどうか、さらに検証を行う必要がある。

<引用文献>

- J・ニーランズ・渡辺淳 (2009)「教育方法としてのドラマ」晩成書房.
- 有田佳代子 (2016)「ドラマ教育の手法を用いた多文化クラスでの日本語表現教育の試み/意見文執筆活動過程で『それまでの世界』は具象化したか」『敬和学園大学研究紀要』第 25 号 pp.69-88
- 小玉安恵 (2018)「オンラインによる異文化協働型の日本文化の授業 COIL の試み—異文化間で活躍できる人材の育成をめざして—」『日本語教育』169, pp.93-08, 日本語教育学会.
- 辻井さとみ・中西久実子 (2021)「COIL における複合的ファシリテーションの有効性—複言語能力・複文化能力を培う COIL—」『ヨーロッパ日本語教育』25, pp.398-409, 第 24 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, ヨーロッパ日本語教師会.
- 中西久実子・Emi Muratamargetic (2018)「Skype の対話による親和性と欧州における日本語学習・日本語教育のモチベーション向上」『ヨーロッパ日本語教育』22, pp.379-384, 第 21 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, ヨーロッパ日本語教師会.
- 守谷智美 (2002)「第二言語教育における動機づけの研究動向—第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として—」『言語文化と日本語教育』5 月特集号 pp.315-329
- 吉田国子「語学学習における動機づけに関する一考察」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』 第 10 号 研究論文 1-13 pp.108-113
- Dörnyei, Z. (2003). "Attitudes, orientations, and motivations in language learning: Advances in theory, research, and applications." *Language learning*, 53(S1) 3-32.
- Gardner, R. C. (1985). *Social Psychology and Second Language Learning: The Role of*

Attitude and Motivation. Edward Arnold.

Nakanishi, K. & Tsujii, S. (2020). Analysis of outcomes from cultural exchange sessions of COIL between Portuguese learners of the Japanese language and native Japanese speakers: Learners of Japanese supported by facilitators in group/pair meetings. The 23rd Japanese Language Symposium in Europe (AJE). p.340-347

Enhancing student motivation using COIL and workshops

Satomi TSUJII (University of Porto)

Abstract

The pandemic has had a major impact on language teaching, primarily manifested in a major increase in online teaching. One of the most challenging issues in online teaching is keeping learners motivated.

Although there have been many studies about maintaining learners' motivation in language teaching, studies relating to learners' motivation in online language teaching are still rare. Therefore, this paper focuses on the issue of learners' motivation in online learning and proposes methods for its enhancement.

The author conducted a two-year study using COIL (Collaborative Online International Learning) starting in 2019, and in the study, the effectiveness of COIL in improving language skills and intercultural understanding was observed, and it was found that the facilitation approach of the teacher had a significant impact on the maintenance of motivation in learning. Based on this study, this paper suggests a combination of COIL and workshops in order to increase learners' motivation in online language learning. Drama-making workshops were an